

# 「リーダー」を育む6か年デザイン

FILE 4

東京都・私立海城中学高校

不断の改革で、時代が求める

「新しい学力」「新しい人間力」を育成

建学の精神に立ち返り、  
「新しい紳士」の育成を掲げる

海軍兵学校の予備校を前身とする東京都・私立海城中学高校が学校改革に着手したのは、約25年前のことだ。例年50人前後の東京大学合格者を輩出していたが、進学後に留年する卒業生も多く、それが校内でも課題が上がっていた。校長特別補佐の中田大成先生は、次のように振り返る。

「大学合格自体が目的になり、大学で学ぶ目的を見失ってしまったことが、留年の要因だと考えられました。本校の建学の精神『国家・社会に有為な人材の育成』に立ち返り、教育活動を見直す必要がありました」  
そこで、創立100周年の翌年にあたる1992年、建学の精神に基づき、社会に出て活躍できる人材育成の実現に向けた学校教育目標を、「21世紀に必要なとされる『新しい学力』『新しい人間力』の育成」として教育活動の刷新を図った。

「新しい学力」は、課題を発見し、その解決に向けた情報収集・分析を行い、ソリューション

ションを生み出す「課題設定・解決能力」であり、「新しい人間力」は、共生のための対話的なコミュニケーション能力と、異質な背景を持つ人間同士が協働し、互いに力を引き出しながら新しいものや価値を生み出すコラボレーション能力と定義した。それらの資質・能力の育成に向け、同校は90年代から試行錯誤を重ねてきた。

仲間と力を合わせて行う体験活動  
で協働性や当事者意識を育む

「新しい学力」の育成に向けた取り組みの1つは、90年代に始めた「社会科総合学習」だ。それは、中学1〜3年次に週2時間、調査・発表を行い、学期に1回、レポートにまとめる探究学習だ。生徒が自分で決めたテーマに沿って、企業や自治体、大学などに自分で連絡して話を聞きに行き、それに文献やインターネットで調べた情報を加えて解決策を提案する。中学3年次には、学習の集大成として、原稿用紙30〜50枚の卒業論文を作成する。

「生徒は、『社会科総合学習』を通じて、



東京都・私立海城中学高校  
中田大成 なかた・たいせい  
教職歴34年。同校に赴任して27年目。  
校長特別補佐。入試広報室長。

- ◎ 設立 1891（明治24）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／男子校
- ◎ 生徒数 1学年約320人
- ◎ 建学の精神 「国家・社会に有為な人材の育成」
- ◎ 2018年度入試合格実績（現浪計） 国立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京大などに188人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ726人が合格。
- ◎ URL <https://www.kaijo.ed.jp/>

自ら学ぶ姿勢を身につけていきます。大学での留年率が大幅に下がるとともに、ゼミで率先して発表し、ディスカッションを主導する卒業生が増えました」（中田先生）

「新しい人間力」の育成では、中学1・2年次のプロジェクトアドベンチャー（以下、PA）と、中学2・3年次のドラマエデュケーション（以下、DE）が中心的な取り組みとなる。PAは、立木や丸太などを使いながら、生徒たちが力を合わせて課題に取り組みプログラムだ（写真）。活動を終える度にメンバーで成功や失敗の要因を話し合い、気づきを獲得する。

「振り返りによって生徒は様々なことに気づき、それが知恵として昇華されていきます。授業や日常生活で似たような場面に遭遇した時に、その知恵を生かして課題を乗り越えることができるでしょう」（中田先生）

次世代リーダーの育成に向け、変革を進める私立中高一貫校を取り上げ、特色ある取り組みを紹介する本シリーズ。最終回は、東京都・私立海城中学高校を紹介する。同校は、大学進学後の留年率の高さを発端として、建学の精神に立ち返り、社会に有為な人材の育成に向けた様々な教育活動に取り組んでいる。



写真 中学2年次のプロジェクトアドベンチャーの様子。下で友人に命綱を支えてもらいながら、恐怖の伴う高所での課題に挑む。そうした活動を通して、信頼に基づいた支援の大切さ、協働して課題を成し遂げる達成感を学ぶ。

DEは、演劇の専門家の指導を受け、生徒が自ら演劇をつくり上げるプログラムだ。例えば、中学2年次には、地域の人々に人生の思い出を聞き、それを基に台本を作成して上演する。生徒はその過程で多様な人があること知り、さらに同じ話を聞いても、人によって受け取り方が違うことに気づく。「DEの活動を通して、人には様々な考えがあることを改めて実感し、互いの価値観を尊重する態度へと結びついています。さらに、PAもDEも、生徒同士で話し合い、力を合わせて取り組む活動が、対話的なコミュニケーション能力の基盤をつくります。そうした経験を経た後の学習や行事では、リーダー、フォロワーにかかわらず、自分事として当事者意識を持って協働的に取り

### eポートフォリオの活用で 生徒の気づきを促す

組むようになりす」(中田先生)

約20年にわたる取り組みをさらに発展させようと、17年度、eポートフォリオによる振り返りを始めた。中学3年生にタブレット端末を持たせ、「Case」(\*)を活用して、学習や部活動など、生徒個々にテーマを決め、自由に記録を残させた。その1年間分を分析すると、年度末に向けて、事実・内省を踏まえた具体的な目標・計画が書かれた振り返りが多くなっていき、生徒の主体的な活動が増えていることが分かった(図)。

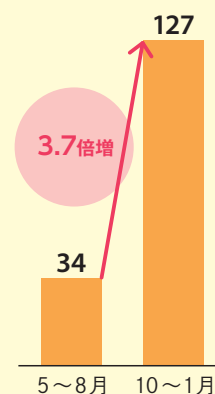
「eポートフォリオで、主体性が数値化され、その伸びが顕著に分かるようになりました。振り返りは、生徒の気づきを生み、よい刺激になってるので、学年を拡大して活用したいと考えています」(中田先生)

同年度には、教師と生徒が特定のテーマについて学び合う自由参加型講座「KSプロジェクト」にも着手した。中学2年次、高校2年次を対象に、理科の実験の動画を海外姉妹校に送り、フィードバックをもらって再実験をして深める講座や、英字新聞「KAIJOTIMES」を発行し、世界に発信する講座などを開催している。

「中学・高校時代に自分の興味・関心を徹底的に掘り下げていく体験が、生涯学び続

#### 図 ポートフォリオの実証結果

■主体的な活動(レベル3~5)の数



ポートフォリオに書かれた振り返りの内容によって、「レベル0 学習とは無関係な内容」から「レベル5 体系化した上で具体的な行動に落とし込む」まで、5段階で評価。レベル3~5を主体的な活動と定義し、期間中のその数を調べた。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

ける意欲や態度を育むと考えています。また、社会に開かれた学びを追究することは、異質なものを結びつけ、新しい価値を創造する素地を養うことにもつながるでしょう。予測不能の学びに教師が積極的にかかわることで、生徒の潜在能力を引き出していきたいと思えます」(中田先生)

そのようにして育む「新しい学力」「新しい人間力」は、次期学習指導要領で育成が求められている資質・能力と重なり、また、大学入試改革にも十分対応できると、同校は捉えている。

「本校の取り組みはいずれも主体性や対話を重視した学習であり、eポートフォリオは多面的・総合的評価に結びつくものです。今後の大学入試では記述式問題が増えることが予想されますが、それらの学習の積み重ねが生きてると考えています」(中田先生)

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。